

令和 6 年 5 月 24 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20K01020

研究課題名(和文) 清代後期盛京社会における科举受験と婚姻：マンチュリア地域変動のなかの新たな選択

研究課題名(英文) Imperial Examination and Marriages in Mukden Society in the Latter Half of the 19th Century: New Choices and Strategies in the Historical Changes in Late Qing Manchuria

研究代表者

古市 大輔 (Furuichi, Daisuke)

金沢大学・人文学系・教授

研究者番号：40293328

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、19世紀後半の盛京における文人科举官僚家族の歴史を紐解き、そこに表れた彼らの社会的戦略とその特徴を明らかにすべく作業を進めた。その結果、以下の点が明らかになった。

(1)清代後期の盛京社会では、清初に盛京に移住し、この時期になって始めて科举合格者を輩出したという変化を経験した家族集団が増加したが、彼らはその変化を基礎に地域社会における自集団の地位の安定と域外への婚姻圏の拡大とをさらに求めていったことが見て取れた。(2)この清代後期という時期は、旗人・漢人を問わず、そうした新興科举官僚家族集団の抱いた戦略が盛京社会に広く行き渡りつつあった時期であったという見通しを示すことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究で提示し得た清代後半の盛京における文人科举官僚家族の社会的戦略やその特徴からは、清代マンチュリアという移民社会のなかの「移動」現象のみならず、その地域への「定着」という過程の一端を垣間見ることでもでき、その長期的歴史変動過程を理解するための新たな観点・論点を提示できたこと、また、これによって清代中国における移民社会の歴史研究などにも新たな提起をなし得ることなどが、本研究の学術的意義として挙げられる。

また、本研究で試みた歴史の捉え方は、大きなうねり・変化・流動性のなかで日常的にそれへの対応を迫られている現代の個人や家族の選択・判断に対しても、小さいながらその参照事例・提言として提示し得る。

研究成果の概要(英文)：In this research, I focused on the history of civilian bureaucratic families in Mukden in the second half of the 19th century and pointed out the characteristics of their history and their social strategies on their marriages. I have some remarks as follows.

(1)For the first time in the second half of the 19th century, many of family groups that had migrated from northern China to Mukden at the beginning of the Qing period began to succeed to pass the imperial examinations.

(2)The social strategies on marriage of the newly emerging family groups of the government officials in Mukden, both Han and Bannermen, had been spreading widely and commonly throughout Mukden society in the late Qing period.

研究分野：中国清代史

キーワード：清代 盛京 科举 婚姻

1. 研究開始当初の背景

17世紀に成立した清朝は、マンチュリアを自らの故郷、特別地域として認識してきたが、そのマンチュリアは18世紀以降、漢人移住を背景とした社会経済的な変動を経験し、19世紀後半以降には、中国・朝鮮への勢力拡大のための拠点として西欧列強がマンチュリアへの進出を開始した。これに対抗するため、清朝はマンチュリアで諸改革を断行したが、こうした諸改革の推進に並行して、マンチュリアを次第に「辺境」として認識するようになった。

マンチュリアのこうした大きな変動の歴史的意義を如何に説明すべきか、そして、それを経験したその域内の人々と社会はこの歴史変動と如何に関わり、また、その社会は如何なる選択・戦略によってこの変動に対応したのであるか。本研究課題の核心には、内部の視点を加えつつ、清代のマンチュリアにおける地域変動の特徴を複合的に、総合的に明らかにしてゆこうとする研究代表者(古市)の大きな「問い」があった。

この大きな「問い」を踏まえ、研究代表者自身は、これまでの研究を通じて、清代後期における盛京旗人社会のなかのいくつかの家族を例にしつつ、彼ら家族集団がこの時期のマンチュリアの大きな地域変動のなかで、新たに科挙受験に参入し、かつ従来とは異なる社会階層の家族との姻戚関係を構築していくという変化をすでに指摘してあるが、この指摘をさらに発展させた新たな研究課題として、彼ら家族集団の科挙受験や姻戚関係の構築のありかたの変化のなかに清代後期の盛京社会に共通するような特徴を見出し、科挙と婚姻がその社会で果たした役割と意義をマンチュリアの地域変動の趨勢と絡めながら確認してゆこうとする試みも可能ではないかと考えた。

因みに、これまでの研究成果のなかでは、マンチュリアの人々とその家族集団が清代後期に新たに科挙受験・婚姻に趨ったその背景や動機が何処にあるのか、清代後期のマンチュリアに見られる人々の科挙受験や姻戚関係の構築が何を意味するものであるかといった問いを掲げるものは殆どなかった。そこで、研究代表者は、そうした動機や選択・戦略に基づく彼らの試みが清代後期マンチュリアの地域変動のなかでいかなる歴史的意義を持つのか、このことを検討することの余地が残されているのではないかと考え、清代マンチュリアの地域変動を、漢人社会だけでなく、旗人社会のなかのミクロな動きも含めて総合的に論じようとするその試みを本研究課題として想起したわけである。

なお、この試みは、科挙受験と婚姻にみられる特徴が旗人・非旗人を問わず域内で広く共有されていたことを指摘することを通じて、清代のマンチュリアにおける大きな地域変動をミクロに捉えようとする試みであって、清代マンチュリア史研究のなかで、考察対象の広がりや深化、考察対象となる時間軸の長さ、さらには考察視点の具体性などの方法面での独自性を有するだけでなく、清代マンチュリア史とその意義を問うための新たな見解を提示し得る創造性をも有するものである。また、清代後期のマンチュリアにおける歴史、特にそのミクロな側面を象徴する盛京社会の歴史を紐解くことを通じて、20世紀初頭以降の奉天(盛京)における地域有力者層の台頭過程や地域社会の形成過程との間の連続性を整合的に説明し得る新たな知見と議論の可能性をも提示することにもなると考えたのである。

2. 研究の目的

研究代表者によるこれまでの研究成果によって、盛京旗人社会に属する著名な家族集団の一部が清代後期に入って初めて科挙受験と新たな姻戚関係の構築に努め始めたことの一部を窺うことはすでに進められているが、上記のような学術的背景や研究代表者のそうしたこれまでの研究成果などを踏まえつつ、本研究課題では、清代後期にそうした盛京旗人家族が趨った科挙受験・婚姻のなかに窺える動機や選択・戦略が、旗人・非旗人の別を問わず、域内の他の家族集団にも共通しているか否かを確認し、さらにそのうえで、そうした動機や選択・戦略に基づく彼らの試みが清代後期マンチュリアの地域変動のなかでいかなる歴史的意義を持つのか、という点を検討することを基本的な課題として挙げ、具体的には、以下の3点について明らかにすることをその目的・目標に掲げた。

まず第1に、清代後期盛京の満洲旗人家族のいくつかに見られた社会的選択の変化・傾向をより網羅的に検討し、その変化・傾向に関する議論の普遍化を目指すことである。具体的には、満洲旗人だけでなく、漢人(非旗人)の新興科挙官僚家族や、漢軍旗人・蒙古旗人で清代後期に入って新たに科挙受験に趨った家族集団をも併せて数多く採りあげ、その科挙受験や婚姻の事例を中心に、それらの家族史を具体的に復元・考察するという課題に取り組むこととした。

第2に、清代後期の盛京における伝統的な教育機関であった書院や私塾の創設過程に注目し、そこに旗人・漢人社会が如何に関わりを持つようになったかについて、具体的な検討を加えることである。盛京社会のなかでの科挙官僚家族の台頭と並行して生じていた域内の動きの一つとして、科挙受験の準備のための書院・私塾などの形成が見て取れると考えたからである。

第3に、旗人家族・非旗人家族を含めた盛京社会のなかに生まれてくる文才重視・科挙重視の傾向を確認し、その傾向が20世紀初頭以降の奉天における地域有力者層の台頭や地域社会の形

成へと繋がってゆくことを展望することである。清末奉天には旗人を含む在地有力層が地域エリートとして台頭し、当該地域での指導的役割を担うようになっていたが、そうした動きの前提として、清代後期の盛京社会で文才重視・科挙重視の雰囲気・傾向・趨勢が生まれつつあったことの指摘を試みることにした。これに併せ、清末以降に旗人・非旗人集団が共に奉天の地元有力者層に成長していくその歴史的前提として、旗人・非旗人の別なく清代後期の盛京社会に拡がりつつあった科挙重視の傾向を如何に位置づけるべきか、その検討も試みることにした。

3. 研究の方法

以下、上掲3点の目的・目標に到達すべく、本研究課題では、以下のような具体的な研究計画と方法を設定した。

(1) 清代後期の盛京社会を構成する人々・家族の歴史、特に彼ら家族集団の科挙受験と婚姻の事例を広く確認するため、未だ検討し得ていない別の盛京出身の満洲旗人官僚とその家族について記された諸史料(族譜・年譜・同年録など)からその官僚の事績やその家族史に関する記事を抽出し、科挙受験と婚姻の事例に現れるそれぞれの家族集団の戦略・動機やその特徴などを指摘する。

(2) そうした満洲旗人家族との間に姻戚関係などの人的関係を構築していった別の旗人家族(漢軍旗人・蒙古旗人)・非旗人の漢人家族などに関する記事も(1)と同様の諸史料から抽出し、それらの旗人家族や漢人家族の歴史を復元したうえで、それらの家族集団の歴史の特徴についても併せて指摘を試みる。

(3) 姻戚関係や交友関係を有していたそれら家族同士の歴史を照合・比較し、科挙受験や姻戚関係の構築のなかに何らかの共通した戦略・動機が認められるかどうかを検討・確認する。

(4) 盛京出身の旗人・非旗人官僚家族が関与した書院や私塾の歴史を、地方志その他の関連史料を用いて具体的に復元・描写し、そのうえで、清代後期の盛京社会における伝統的教育機関の創設過程と人々の科挙受験の趨勢との間の関わりを指摘する。

(5) 清代後期において、旗人家族・非旗人家族を含めた盛京社会のなかに生まれてくる文才重視の雰囲気・傾向・趨勢を諸史料から浮かび上がらせたうえで、科挙受験や婚姻の事例にみられる盛京の人々の戦略や動機が、旗人・非旗人の別を超えて広く存在した文才重視の風潮と足並みをそろえたものであったことを導き出す。

4. 研究成果

本研究課題では、上述の目的や方法に基づいて研究を進め、以下2件の研究成果を得た。

(1) まず、盛京旗人家族との間に姻戚関係などの人的関係を構築していった漢人家族に関する記事を諸史料から抽出し、そのうちの遼陽出身の劉氏一族による科挙受験と姻戚関係の構築の経緯と時期的変化について論じ、それらの調査結果を「清代後期の遼陽劉氏とその家系 19世紀前半におけるその婚姻・科挙受験からみた」として公表した。

ここでは、清代マンチュリア南部の移住社会における家族集団の選択の一齣を示し、この家族の歴史から、以下のような特徴・意義を指摘・推測し得た。

まず、第一の特徴として、清代後期における遼陽劉氏の婚姻には、同郷の有力な漢人科挙官僚家族だけでなく、マンチュリアに早くから政治的・社会的地盤を有していた満洲旗人の名士層との間の繋がりも強く意図されていたのではないかと、という点を挙げた。地方社会における有力な漢人科挙官僚家族や名門の満洲旗人家族との間に交わしたこうした多面的な婚姻関係の構築のありかたからは、この遼陽劉氏が、名震・文麟父子の科挙及第をきっかけに、マンチュリア南部の地方社会のなかの各方面に自身の影響を拡げようとするねらいを持っていたことを推測することができる。

因みに、これを換言すれば、遼陽劉氏の家族集団から婚姻関係を構築する相手として格好の存在とみなされていたのは、同郷の漢人科挙官僚家族だけでなく、満洲旗人の名士家族もそうであったということになる。このことは、マンチュリア南部の地方社会では、清代後期においてもなお、清朝支配層の一員たる旗人家族集団というその政治的伝統やステータス、さらに、そのなかの一部の旗人家族が持っていた経済力などが依然として大きな影響力を保ち、それはその地方社会のなかの漢人新興科挙家族にとっても充分魅力的な要素であったことを物語る。そして、新興の漢人科挙官僚家族にとって、そうした旗人家族集団の持つ各方面での影響力と、自集団から生み出される科挙官僚としての政治的ステータスとを融合させていくことが、この地域の地方社会において自集団の社会的地位を上昇させるのに不可欠な要因となっていたのではないかと、という点を推測することも可能となるであろう。

また、第二の特徴として、(1)の論考で採りあげた漢人科挙官僚家族のいずれもが、清初の時期に直隸省東部からマンチュリア南部に移住してそこに定着している、という共通する歴史を持っていた点も指摘し得る。これらの家族が経験した共通の歴史からは、もともと直隸省東部の地域に拠点をもっていた家族集団が清初にマンチュリア南部へ移住してきたという、清代マンチュリアにおける移住民の歴史の典型・パターンの一つを措定することもできるように思う。

(2)本研究課題ではさらに、科挙受験の準備のための書院・私塾など、盛京における伝統的教育機関の形成過程に関する諸史料を調査し、その時期的展開の大凡を確認しつつ、上記(1)で採りあげた遼陽劉氏との間に姻戚関係を持っていた瀋陽陳氏の家系とその姻族についての調査も行い、その瀋陽陳氏の持つ文人家族としてのネットワークのありかた・特徴・地域的拡がりやその婚姻における選択の一齣も確認し得た。それに加え、盛京におけるそれら私塾・書院が地元の文人家族の動向に与えた影響を論じるための素材も併せて得ることができたため、これらの調査を踏まえて「陳玉章と清代後期の瀋陽陳氏 清代 19 世紀盛京の文人家族」と題した論考を公表し、瀋陽陳氏を一例とする清代後半の盛京における文人家族のネットワーク形成のありかたや地域的拡がり、その婚姻における選択の特徴などを提示した。

ここでは、(1)清代後期の瀋陽陳氏の婚姻には、盛京の域外にある山東省への婚姻関係の拡大方向と、盛京の域内における文人家族・科挙官僚家族との婚姻関係の形成という方向とが併存していたこと、(2)この瀋陽陳氏と同じく、そのいずれの姻族も、この清代後期になって始めて科挙合格者を輩出した新興科挙官僚家族であり、かつ、どの家族も自身の文化的伝統として、その構成員が文章の才能を備え、詩を嗜んでいた文人家族であったこと、などを明らかにした。

すなわち、瀋陽陳氏やその姻族はいずれも、この清代後期になって始めて科挙合格者を輩出するようになった家族であり、彼らはその科挙合格を活かしつつ、地域社会における自身の家族集団の地位安定と域外への婚姻圏の拡大とをともに求めていくという選択をおこなったものと考えられる。こうした選択に基づきながら、瀋陽陳氏は、盛京域内に基盤を持つ漢軍旗人家族や漢人文人家族との婚姻のみならず、域外の山東省に基盤を持つ文人家族との婚姻を実現させていったのではないかという点を指摘し得る。

総じて、上記2つの家族の歴史の事例からは、清代後期の盛京社会では、清初に盛京に移住し、この時期になって始めて科挙合格者を輩出したという歴史の変化を経験した家族集団が増えつつあったことがあらためて指摘できる。こうした新興の科挙官僚家族は、そうした変化を経たうえで、地域社会における自集団の地位の安定と域外への婚姻圏の拡大とをさらに求めていったものと考えられるが、こうした動きは、この清代後期という時期が、旗人・漢人を問わず、新興の科挙官僚家族集団という存在とそれら家族の抱いた戦略が広く盛京社会に行き渡るようになった時期であったことを示唆しているものでもあろう。

今後の課題としては、まず、遼河流域の各都市に地盤を持っていた他の有力家族の事例や、清初にマンチュリア南部に移住してきた他の漢人家族の事例などもさらに広く検討・考察し、そのうえで、上記のような歴史的経験の共通性についてより厳密に実証していくことがなお不可欠であるという点が挙げられる。また、清初の時期において清朝がマンチュリアとその周辺に対して実施した漢人移民政策とその展開過程にもあらためて注目すべきであろう。入関後の清朝による中国支配の開始と並行して、マンチュリアでは、清朝がその地の耕作者不足を補完するために中国内地の漢人に対して開墾を奨励する政策を一時的に導入していたが、本研究課題で指摘し得たような、18 世紀末から顕著になりつつあったマンチュリア南部（盛京）における新興漢人科挙家族の台頭が、それに先んじた清初 17 世紀半ばの清朝による内地漢人に対するこの開墾奨励政策との間に如何なる関係を認め得るのか、この点も、清代後期、特に 18-19 世紀の時期のマンチュリアにおける歴史的変動を清初の時期を含む長い時間軸のなかで検討していく際に不可欠となる課題点・論点の一つとして提示しておきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 古市大輔	4. 巻 16
2. 論文標題 陳玉章と清代後期の瀋陽陳氏 清代19世紀盛京の文人家族	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 金沢大学歴史言語文化学系論集 史学・考古学篇	6. 最初と最後の頁 1-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 古市大輔	4. 巻 14
2. 論文標題 清代後期の遼陽劉氏とその家系 19世紀前半におけるその婚姻・科挙受験からみた	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 金沢大学歴史言語文化学系論集 史学・考古学篇	6. 最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 古市大輔
2. 発表標題 《小学生文庫》『東三省』の刊行・改訂と1930年代前半の日中関係 近代中国における政治外交と出版・教育との関わりの一齣として
3. 学会等名 金沢大学ボトムアップ型主要研究課題「国家・社会をめぐるコミュニケーションの諸相の歴史学的解明」ミニシンポジウム
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------